

# 最上小国川ダムは地域に貢献しているか？－明らかになった環境問題－

2020年3月に、穴あき(流水型)ダムとしては全国で5番目となる最上小国川ダムが完成しました。4年経った現在、山形県が最上町・舟形町の方々にダム建設のために約束していたことや私たちが最上小国川ダム建設差し止め住民訴訟\*1で主張していたことは、どうなっているのでしょうか。

私たち「最上小国川の清流を守る会」では、支援者の協力を得ながら、ダム完成後も最上小国川の水質調査や赤倉温泉での流れの記録、大雨時のダムの状況把握などの活動を続けてきました(写真1)。

その結果、主に次のような疑問や問題があることが分かってきました。



写真1 2024年7月豪雨時のダムの様子

(1) 山形県が発行した『小国川だより』35号(平成24年1月25日)では、「濁りの成分が鮎の餌である付着藻類の質に与える影響は小さいと判断できます」としていますが、私たちの調査では、ダム下流の石や川原の状態は、確実に変化の兆しが認められます。

(2) 山形県はダムの穴詰まりを防ぐために、流木止めを設置するとしていました(平成25年11月22日小国川漁協への説明)。具体的にはダム上流100mと2km地点の2カ所としていましたが、いまだ設置されておらず、構造も確定していない状況です。

ダム上流域では、戦後にブナなどの広葉樹林が大量に伐採され、その時植林した杉が伐採時期を迎え、現に伐採が進められています。果たして、2カ所の流木止めが設置されていない現状で大丈夫でしょうか。

(3) 山形県がまとめた「最上小国川清流未来振興図」によると、いろいろな振興プランが提示されていますが、実現されていないものが多くあります。地域観光・温泉資源の活用はどうなっているのか、厳しく問われなければなりません。

## 1. 住民の安全安心は確保されないまま

ダム建設が大詰めを迎えた、2019年9月に流水型ダムの要となる常用洪水吐(穴)から通水を開始しました。実質的に流水型ダムの共用を開始したことになります。その直後の10月に台風19号による大雨が降り、このとき、ダムにより下流の流量は抑えられ赤倉地区では洪水が起こらなかったため、当初の計画通り効果があったと、多くの人は思ったはずですが。その後、2022年6月と今年の7月にも豪雨災害があり、同様に下流の流量は確かに抑えられました。

しかし、ダムが守る対象とした赤倉地区では、最上町から住民へ避難指示(対象地域の全員が速やかに危険な場所から避難する指示)が出ていました。ダムが出来ても安心して暮らせるようにはなっていないのです。なぜでしょうか？

私たちの裁判の争点の一つに、洪水には外水被害と内水被害\*2があり、内水被害はダムでは防げない

のだから、ダムに頼るだけでは不十分だと主張しました。裁判所は県が内水被害対策として赤倉地区の川の両岸に排水施設を整備したことから、この問題は解決済みと裁定しました。でも、住民の命を守る責任のある町ではこの対策でも不十分だと判断していたのです。ダムを造ったのは良いが、一部の洪水に対してしか効果がなかったこととなります。ダム建設に費やした税金は88億円でした。これでも安い買い物と言えるでしょうか。

## 2. ダムに頼った県の河川行政の不備が表面化

今年7月の豪雨災害では県内の河川で甚大な被害が発生しました。最上小国川でも「ヤナ茶屋もがみ」(旧川の駅)が浸水し、吊り橋が流されました。このような被害は2018年にも起きています。県は、この場所は川幅が狭く一度に流せる水量が限られることから洪水になることは重々知っているはずですが。それではなぜ同じ過ちが繰り返されるのでしょうか？

第1の疑問は、県が、このような場所に、川の流れの障害になる右岸の露岩斜面に「ヤナ茶屋もがみ」の敷地の造成許可をし、さらに手すりの付いた鋼鉄製フレームの恒常的な大型「ヤナ場」を設置することを許可していることです(写真2)。私たちは、この場所を複数の専門家に見てもらいましたが、このような事例は他にないとのこと。たださえ川幅が狭い場所にさらに川の流れを遮る構造物を設置することは、河川行政の立場からすれば許されることではないはずですが。

第2の疑問は、吊り橋のたび重なる流失です。この吊り橋は「道の駅もがみ」の開設に合わせて設置されたものと思われそうですが、2018年の反省点を踏まえて設計することはなかったのでしょうか。少なくとも駐車場が浸水したのですから、より高い場所に吊り橋を設定する必要があったはずですが。(裏面に続く)



写真2 ヤナ茶屋もがみの河道に設置されたヤナ場

### \*1 住民訴訟

2012年、当会が山形地裁に「最上小国川ダム建設差し止め住民訴訟」を起こした裁判。山形地裁は判決を2回延期の上、2019年に「公金支出差し止め請求」を却下、同年仙台高裁に控訴、2020年「控訴棄却」、同年最高裁に上告したが棄却され結審となった。

### \*2 外水被害と内水被害

外水被害は川が増水・氾濫して起こる被害、内水被害は川の外側に降った雨水が川に排水できずに浸水して起こる被害。同時に起こることもある。



### 3. 流水型ダムは環境に優しくなかった

流水型ダムは、平常時に水を貯めないで「環境に優しい」と喧伝されてきました。しかし、洪水時に水を貯めるという点では従来のダムと変わりません。またこのとき下流に流す水を制限する点においても同様です。

川は本来、洪水時に河床を更新するという機能を持っているのですが、ダムだけに頼る洪水対策では、この**更新機能を妨げることになるのです。これが、流水型ダムの根本的な問題です。**

#### (1) たび重なる豪雨で流水型ダムの本質的欠陥が露わに

今年の7月25日に秋田・山形両県を襲った豪雨災害では、最上小国川ダムも湛水し、通常より水位が24m上昇しました。水が引いた後、ダム湖底だった場所には堆積した泥が残されていました(写真3)。悪いことに、最上小国川ダムの場合は、ダム上流域に脆い崩壊地があることにより、ダムの上流に泥の供給源を抱えているのです。

湖底にたまった泥は、ダムの水位が下がって通常の流れに戻る段階で、元の河道部分では洗い流されますが、それ以外の大部分の場所では残ったままです。これがその後の大したことの無い雨に洗い流され川が濁るのです。先の豪雨では、その後も毎日雨が降り7日間濁り続けました。この過程で泥は河床の石に着いた苔に付着し、鮎は泥の付いた苔を食べざるを得ず、その結果、鮎の品質<sup>3</sup>が低下します(写真4)。

#### (2) 最上小国川流域環境保全協議会のダムの影響評価への疑問

ダム完成後の環境への影響を評価するために、最上小国川流域環境保全協議会(以下協議会)が開催されています。最新の第22回(R6/3/13開催)の資料では、ダム供用後モニタリング結果の総括〔下流河川生態系〕として、「魚介類・優占種に変化はなく、重要種も確認された。・優占種にヤマメが確認された。」とあります。

しかし、魚介類の調査にはダムの上流4.5kmにある田代橋のデータが含まれていました(図1)。私たちの調査によれば、田代橋ではダム供用後も以前のきれいな河川環境が保たれています。ダムの影響を正しく評価するのなら下流域のデータを使うべきです。協議会の委員の方々には県の誤りを質していただきたいものです。



写真3 湛水時にダム湖底に堆積・沈殿した泥

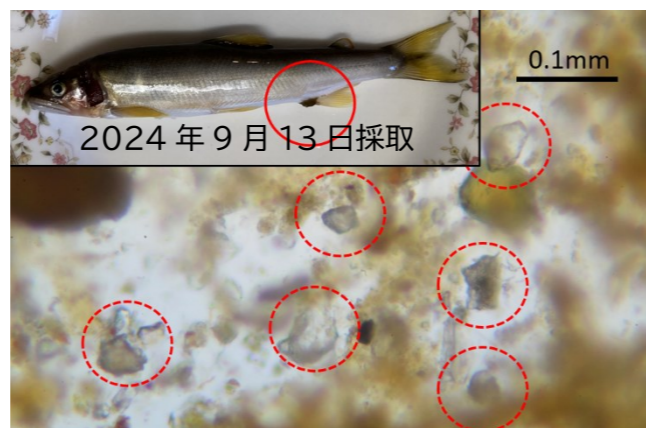


写真4 鮎のフンに見つかった多数の微粒子



図1 協議会で使用した魚介類調査地点の地図  
協議会の資料にダムと2つの温泉(♨)を加筆。

### 4. 地域振興への貢献は期待外れ

ダムのもう一つの効果として、町当局やダム推進派住民が期待した地域振興についてはどうでしょうか。

#### (1) 観光業への影響

図2は最上町商工観光課がまとめた、町内の主な観光地への来客数の推移です。同じ町内でも「瀬見温泉」(図1♨<sup>2</sup>)は新型コロナ緊急事態宣言が解除されてすぐに回復していますが、ダムが洪水から守る対象とした「赤倉温泉」(同図♨<sup>1</sup>)ではその回復が鈍くなっています。2023年には、回復したかに見えた前年より減少しており、今後の推移が気になります。

また、最上小国川は天然アユの宝庫として知られ、多くの釣り客が訪れていましたが、ダム運用開始年から減少傾向にあります。

#### (2) 漁業への影響

最上小国川の漁業を担っている、小国川漁協で最も大きな収入源である鮎の収穫量はどうなっているのでしょうか。「小国川漁協だより」から年間の鮎漁獲量を組合員(やな漁を含む)と遊魚者(一般の釣り客)に分けて見てみました。これによれば鮎漁獲量はダム運用開始からそれ以前に比べて減少したままです(図は省略)。

次に小国川漁協の財務状況を見ると、ダム運用開始後は事業損益がマイナスとなっています(図3)。2023年になってプラスになったものの、業務委託料の受給期限(令和6年度)が過ぎれば再びマイナスに転じることは確実と見られます(同図赤線参照)。もちろん、これは組合員数の減少など他の漁協と同様の問題を抱えていることも要因の一つですが、少なくともダム建設は漁協運営にとってプラスには作用しなかったと言えます。

最後に、ダムの影響には長い年月がたってから現れるものも多くあります。当会では今後も地元の皆さんと共に注意深く見守ってまいります。

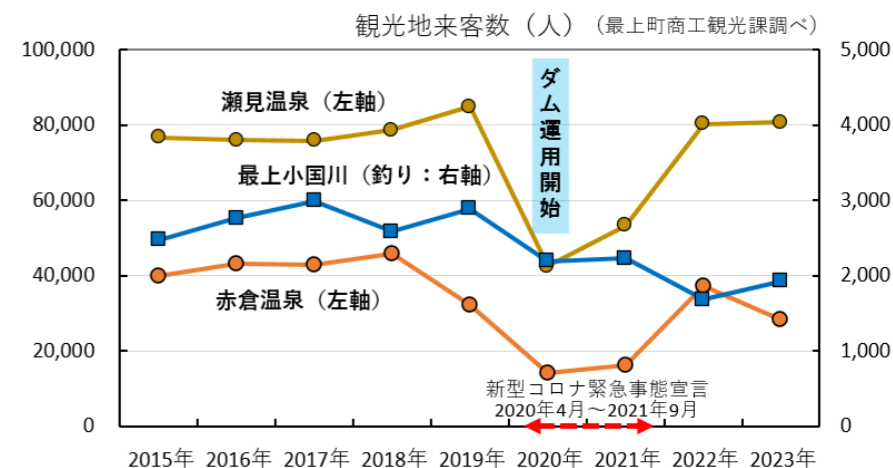


図2 主な観光地への来客数の推移

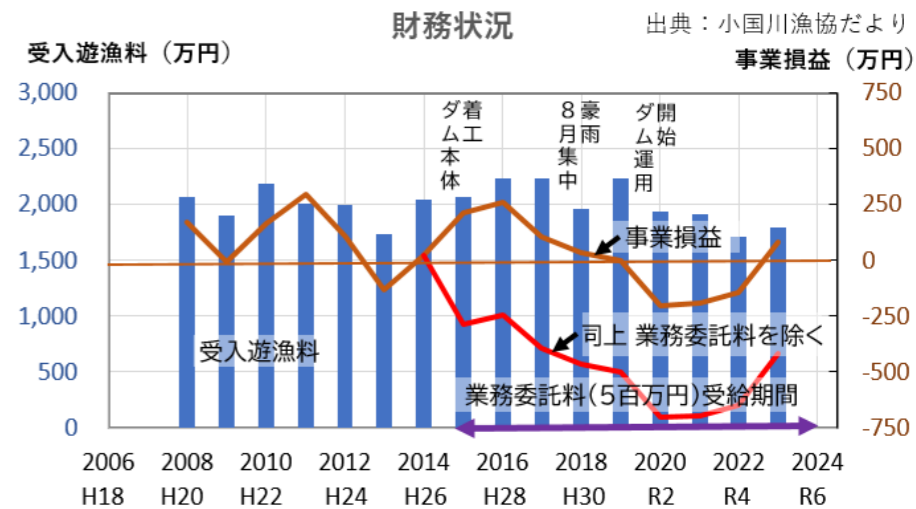


図3 最上小国川漁協の財務状況の推移

\*3 鮎の品質:清流めぐり利き鮎会(全国品評会)では、鮎の塩焼きを、姿・香り・わた・身・総合の5つの要素で食べ比べて評価します。最上小国川の鮎は2015年(第18回)に準グランプリを受賞していますが、今はどうなのでしょう。